

令和6年度の霧島ジオパークに関する学術研究の要旨
「霧島ジオパーク」大隅地域に伝わる巨人伝説と文化遺産についての研究
～柳田國男の『ダイダラ坊の足跡』をテキストにして弥五郎どん伝説を読み解く～

第一工科大学工学部西嶋啓一郎

1. 研究の背景

災害による被害を抑えるためには、都市施設等のインフラストラクチャーの整備が重要であるが、その整備の在り方には、「レジリエンス（災害に対する強靱さ）」が求められていて、これが「災害に強い街まちづくり」になる。また、都市施設を整えると同時にそれを使う人が災害対策や防災の意識を持っていなければ、防災対策の活用はできない。そのため最も重要なことは、それを使う人が災害に関する対策を理解し、防災の意識を高めることであろう。

2011年1月に宮崎県と鹿児島県の県境に位置する霧島山（新燃岳）が噴火した。1月19日の小規模な噴火に引き続き、1月26日の噴火、翌27日の爆発的な噴火により、新燃岳周辺の市町には大量の火山灰が降り積もった。噴火は2011年9月7日まで継続し、爆発的噴火の回数は13回に及んだ。このように曾於市や都城市の北側には活発に活動する霧島山の火山があるため、大噴火による火砕流などに対する防災まちづくりが必要である。

2. 研究の目的

本研究では霧島山の火山にまつわる曾於市の文化資源の活用を試みるが、具体的には曾於市や都城市に伝わる大隅隼人の巨人伝説である「弥五郎どん」に着目する。火山と巨人伝説を基盤にした住民のこの地における歴史文化を誇る意義を明らかにすることで、子供の頃から火山などの自然災害に向き合える気持を持つことの重要性の気付きを促すことを目的とした。そのため、以下の命題を設定した。

- ・曾於市の歴史文化資源を活用した持続可能なまちづくりが出来ないか？
- ・柳田國男も巨人伝説に言及した「弥五郎どん」を活用した防災まちづくりは出来ないか？
- ・弥五郎どんを、地域の人々の防災まちづくりの心の拠り所に出来ないか？

3. 研究の方法

霧島山の火山と巨人伝説の関係について、柳田國男の『ダイダラ坊の足跡』をテキストにして弥五郎どん伝説を読み解くとともに、「弥五郎どん」を知るために曾於市関係者聞き取り調査とフィールドワークを行った。そして巨人伝説とそれを活用したまちづくり事例として、福島県で下郷町のだいだら法師伝説と柳津町虚空蔵菩薩明星石の調査を、東京都では、世田谷、北区・墨田区、立川市富士見町で調査を、最後に11月3日行われた「弥五郎どんまつり」を体験した。

また、子供たちへの防災教育と巨人伝説による防災まちづくり事例として、熱海市での調査・「巨人ライン」と防災まちづくりの調査と、2022年から夏と弥五郎どんまつり前夜祭の年二回の公演が開始され、今回は5回目の「弥五郎どんファンタジア 2024」を観劇した。同音楽劇には、曾於市大隅町にある認定こども園のおひさまの杜こども園の園児たちが妖精の役で出演し、巨人の弥五郎どんとのふれあいが描かれている。

4. 調査の結果

7月18日（木）曾於市商工会大隅支所において、弥五郎どん保存会会長中迫勇氏、弥五郎どん祭り実行委員会実行委員長兼弥五郎どん保存会副会長津曲芳夫氏、曾於市商工会大隅支所経営指導員 吉永隆文氏、曾於市生涯学習課文化財係係長加塩英樹氏、曾於市商工観光課観光振興係係長大重志保氏、曾於市商工観光課観光振興係田崎啓太郎氏、一般社団法人曾於市観光協会事務局長荒武圭一氏、一般社団法人曾於市観光協会観光担当伊江朝士氏らに「弥五郎どん」とまちづくりについて聞き取り調査を行った。

本調査では曾於市の弥五郎どんまつり館に展示されている弥五郎どんレプリカや、先行研究としての曾於市教育委員会が2023にまとめた『岩川の弥五郎どん調査報告書』を確認することができた。また「弥五郎どん」には3人の兄弟がいて、宮崎県都城市山之口町の的野正八幡宮の「弥五郎どん」は長男、曾於市岩川八幡神社の「弥五郎どん」は次男、宮崎県日南市飫肥の田ノ上八幡神社の「弥五郎どん」は三男であることがわかった。

8月2日（金）、4日（日）は、静岡県熱海市において、西海造園土木西海尊志氏と熱海市役所市民生活部危機管理課危機管理室長大石真裕氏へのインタビューと伊豆山権現と伊豆山地区土石流現場の現地調査を行った。

熱海市では2021年7月に発生した伊豆山地区土石流のために28人の犠牲者が出る大災害が発生したが、西海さんたちは1980年代の後半から「巨人ライン」というご当地ヒーローを誕生させて、子どもたちが集まるイベントを開催することで、「みんなで熱海を守る」という意識育んでいる。

西海さんによれば、イベントの怪獣ショーの物語では怪獣が街を破壊するという設定になっているが、怪獣とは「荒ぶる自然」あるいは「荒ぶる神」を象徴しているとのことだった。そして巨人ライン（伊豆山権現の化身）は、その怒りを鎮めるための役割を果たす。だから、誰も死なせない、傷つけないようにしたということであった。

8月8日（木）、9日（金）は、柳田國男の『ダイダラ坊の足跡』をテキストにすることで、福島県下郷町出身の佐藤一明先生（元日本経済大学大学院特任教授）と「手長足長（ダイダラ坊）」の足跡と伝えられている「大師溝田」の持ち主の星新栄先生（元福島県会津若松市小学校教諭）へのインタビューと下郷町のだいだら法師伝説と柳津町虚空蔵菩薩明星石の現地調査を行った。

会津平（盆地）には昔から「手長足長」の伝説があった。この巨人はいたずら好きで会津平の人を困らせていたが、この地を通りかかったのが弘法大師との問答によって体を小さくした巨人は大師によって徳利の中に封じ込められ、会津富士として知られ活火山である磐梯山の頂上に埋められたという伝説が確認できた。

会津柳津の靈巖山圓藏寺虚空蔵堂の境内には、この巨人の足跡が残る明星石があると柳田は記しているが、今回の調査では、同寺目黒陽道住職が所蔵する「奥州会津柳津之図」に明星石の位置が記されていることと、その石が近代のダム建設によって只見川が堰き止められ水没したことが確認できた。

8月17日（土）鹿児島市宝山ホールにおいて、音楽劇「弥五郎どんファンタジア2024」の語り部役の市川美保子氏（市川森一古事記製作プロジェクト代表）と脚本を担当する市川愉実子氏、弥五郎どんファンタジア実行委員会委員長で音楽劇弥五郎どん役の小濱健一氏お会いし舞台を観劇した。

音楽劇では、物語の舞台は曾於の里の妖精たちが住む森、時代は720年の隼人の乱を思わせるもので、ストーリーは、曾於にある保育園の園児たちがお気に入りの「弥五郎どん物語」を語り部から聞く

うちに、舞台の森にタイムスリップして弥五郎どんとふれあい楽しい時間を過ごす、そこに突然、他国の軍隊が攻め入って来たことで森の平和暮らしが損なわれてしまったため、「弥五郎どん」は一人で侵入してきた軍隊と戦うが、戦いが長引くことを防ぐために「弥五郎どん」は自らが人質となることで、里の平和を取り戻すというものであった。

8月28日（水）は東京都世田谷区の小田急線世田谷代田駅西口において、都市工学専門の東京大学名誉教授の花木啓祐先生へのインタビューと現地調査を行った。「世田谷代田駅駅前広場」は、2021年3月に「おだやかな日常が歴史になるむら ～富士山が見えるダイダラボッチの駅前広場～」をコンセプトに完成した。

柳田は「代田」の地名は「ダイダラ坊」から来ていると推測している。花木先生は1984年から世田谷代田にお住まいで、小田急小田原線の東北沢～和泉多摩川間の複々線化に伴う世田谷代田駅地下化によって生み出された梅ヶ丘から東北沢までの線路跡の計画は、北沢デザイン会議によって住民を含めて議論されたもので、柳田の『ダイダラ坊の足跡』がデザインコンセプトになっている。駅前広場にダイダラ坊の足跡を模した巨人の足跡が施されていてその向きは富士山を目指している。

8月29日（木）は、柳田の『ダイダラ坊の足跡』に「ダイダラボッチの墓といわれた塚があった」と記されている「天狗の鼻」と呼ばれた地形の突端の「豊島の渡し」の近辺の調査を行った。この場所は、東京都北区と足立区との境界を流れる隅田川が大きく蛇行するところで、ここでも土地の字は代田といい、巨人がこの辺を歩いた時、その草鞆にくっついてた砂が落ちこぼれて、この塚になったという話がある残っている。

9月1日（日）は東京都立川市富士見町において「富士塚」の調査を行った。この地は柳田の『ダイダラ坊の足跡』には掲載されていないが、立川市富士見町に伝承する説話として「でえだらぼっち」伝説がある。この伝説では、頭が雲の中に隠れて見えないくらいの大男である「でえだらぼっち」が下駄を履いてのっしのっしと歩いてきたと伝えられている。

この富士塚は、富士浅間神社の神を祭り、江戸時代に盛んに行われた「富士講」の人々により築かれた塚であるとされていて、「富士塚」と呼ばれているが、立川に富士講の話が残されていないことや、この周辺から須恵器らしき土器片が採集されたこともあり、古墳ではないかとする考えもある。

11月3日（日）は曾於市岩川八幡神社において開催される「弥五郎どんまつり」を体験した。午前1時、弥五郎青年部の人たち（高校生）が鉢巻きを締めて茶色の法被に白ズボン姿で雪駄を履き拝殿の前に整列し、その中のふれ太鼓二組が拝殿に上がって修祓を受け、街に出て太鼓を打ちながら「弥五郎どんが起きっど」と叫んで一時間ほど廻る。午前3時30分頃、宮司より出されたお面が組みあがった「弥五郎どん」に付けられる（魂入れ）。お面は1年に1度、この祭礼のときにだけ公開される。そして夜が明けて午後からは「浜下り」が行われる。八幡神社の境内を出た弥五郎どんが、約3時間市街地を威風堂々練り歩く。大勢の見物客が「弥五郎どん」を取り囲み、祭りは一気に最高潮に達する。

弥五郎どんまつりは、おはら祭り（鹿児島市）、お釈迦まつり（志布志市志布志町）と並び県下三大祭りであり、約900年の伝統がある。始まりは、飛鳥時代に隼人族と朝廷軍の戦いにより、隼人族の戦死者が多く慰霊のため放生会だったとされている。

5. まとめ

・柳田國男にとって「ダイダラ坊」という巨人伝説は、『東野物語』の中にも幾話も語られており、柳

田が民俗学に興味を抱いた当初からの主題であったが、柳田が『ダイダラ坊の足跡』で示した地はどれも火山との関係があることが確認できた。

。巨人伝説は、その国土を支配した神々の重層性によって生じたと考えることができる。すなわち巨人伝説は国津神思想を伝えるもの、あるいは地祇（ちぎ）信仰の名残りであると考えられる。すなわち、大隅隼人の国津神として岩川八幡神社がありそこに祀られている「弥五郎どん」は、大隅隼人の守護神であると考えられる。

- ・火山活動がもたらす自然災害は人知の及ぶものを超えている。そのため火山と寄り添い暮らす人々はその脅威と向き合うことで、災害に対する備えを怠ってはならない。そしてその意識は人々の暮らしの中に伝承されることが求められる。

- ・曾於市に暮らす人々は霧島山の火山と向き合い、この地で伝承されている巨人伝説としての「弥五郎どん」を防災の守護神として、さらに子孫に伝えていくことが望ましい。

- ・一方で、曾於市においても大都市への若者流出による人口減少、住民の高齢化と少子化が進む中で、持続可能なまちづくりを進めなければならない。

- ・本研究では、大隅隼人の巨人伝説を「弥五郎どん」に具現化することで、住民のこの地における歴史文化を誇る意義を明らかにすることで、子供の頃から火山などの自然災害に向き合える気持を持つことの重要性の気付きを促すことを目的とした。